住居が集まっていたとみられます。これらの大集落の立地環境から台地に生活の拠点として活動していたことが想定され、大野川流域全体で共通した社会であったことと推定されます。



二本木遺跡の住居跡

出土遺物は甕と壷に代表される土器のほか鉢や高坏などがあり、さまざまな形や組成がみられます。市内の遺跡からは大野川下流域の大分平野と上流域の阿蘇外輪山地域の両方の文化の特徴があり、地域間交流によると考えられます。



弥生時代後期の壷（左）・甕（右）

石器も磨製品や礫石器のほか装身具なども出土していますが、新たに鉄製の遺物も現れるようになります。狩猟用の鏃（やじり）、工具の斧・鉇（やりがんな）・刀子、農具の摘鎌・鋤先、調理具の磨石や台石などの各用途と考えられる出土遺物が住居跡から出土しました。



弥生時代の石器・石製品



弥生時代の鉄・銅製品

これらの農具や工具、狩猟や調理などの道具が普及したことで食生活をはじめ生活環境が向上し、集落数の急増につながったことと推定されています。また武器類はなく、当時の九州北部で見つかるような戦乱を示すものは見つかっていません。

数多く見つかる生活跡に対し、墓地跡は少ないですが、中原舟久手遺跡（大野町中原）で土坑（どこう）墓群、古市上遺跡（朝地町市万田）で木棺（もっかん）墓とみられる埋葬跡が見つかっています。

大野川流域全体でも共通していますが、弥生時代後期の終末頃以後になると大集落は減少し、古墳時代前期初頭を最後に台地上での集落はみられなくなります。おそらく居住地を台地から平野部に移動させたものと考えられますが、権威の象徴であったと思われる青銅鏡などがこの頃の住居跡から廃棄されたように出土するなど、社会の大きな変化をうかがわせる発見もありました。

●古墳時代

古墳時代は、3世紀中頃に畿内勢力を頂点とする中央集権的な政治体制が成立し、その象徴である前方後円墳が全国に出現する時代です。各地の有力者たちは自らの政治的社会的地位に基づく権威の象徴として古墳と呼ばれる盛土の墳墓を構築していきます。特に前方後円墳という形は畿内政権との強い結びつきに基づくものと考えられています。

市内には 50 基程の古墳が大野川本流のほか各河川流域にまとまって分布しており、特に主要な前方後円墳が 8 基あることから、県下でも多くの有力者が存在した地域の一つであることがわかります。

この頃より集落跡は台地上から河川沿いの平野部にみられるようになります。このことは、水田開発による稲作の発達と、生活基盤や社会構造が変化したことによるものと考えられ、河川水系などを単位とした社会基盤のもとで地域を統率した有力者層が出現したことを示しています。その権威を示すように築いた古墳は時代の象徴でもあり、現在もその姿を保持し続けています。

古墳時代の主な集落遺跡

古墳時代の人々は弥生時代と同じく竪穴住居で生活しています。弥生時代のような大集落は見つかっていませんが、平野部の現在の住宅地と同じような位置に展開していたと考えられます。

また遺物として土師器（はじき）と呼ばれる素焼きの土器のほか、須恵器（すえき）が現れます。須恵器は青灰色を呈した硬質の器で、登り窯で高温で焼かれるなど新しい技術で作られた焼き物です。



古墳時代の土師器 埦･高坏（左）･壺（中）・甕（右）



古墳時代の須恵器

古墳時代前期初頭の住居は舞田原遺跡（犬飼町田原）、久知良遺跡（三重町内田）などで見つかっており、弥生時代とほぼ同様の構造とみられる方形の建物です。中期以降では、上田原東遺跡（三重町上田原）や頭田遺跡（緒方町大石）、加原遺跡（大野町桑原）では壁の一辺にカマドを備えた住居跡が見つかっています。



カマド付の住居跡（田村遺跡）

市内の前･中期の古墳

市内では古墳時代前期の後半より出現し、中期にかけて多くの古墳が築造されています。その分布は、大野川本流より広い平野の存在する支流域ごとにあり、それぞれの地域を支配した有力者層の存在が考えられます。

出現期の古墳として、三重川周辺域の立野古墳（三重町上田原）、平井川流域の坊ノ原古墳（大野町桑原）、緒方川周辺地域の漆生古墳群の大久保 1 号墳（緒方町越生）が挙げられ、いずれも前方後円墳です。

その後、古墳時代中期になると三重川周辺流域で三重古墳群とよばれる前方後円墳の築造が続きます。全長 70 mで市内最大の道ノ上古墳（三重町赤嶺）をはじめ、小坂大塚古墳（三重町小坂）・重政古墳（三重町内田）･秋葉鬼塚古墳（三重町秋葉）


立野古墳


重政古墳の葺石

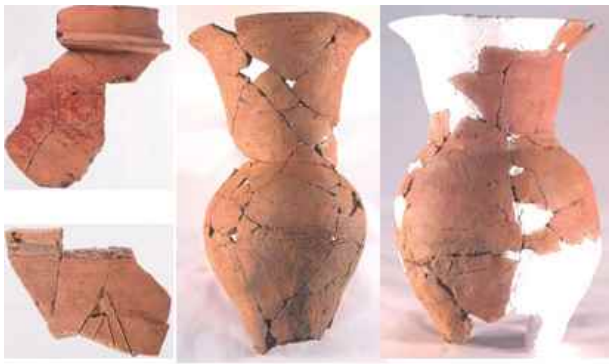
など相次いで築造されます。しかし中期後半の竜ヶ鼻古墳（三重町赤嶺）を最後に前方後円墳の築造はなくなります。

それ以外の地域では、中期以後は円墳のみの築造が続き、平井川流域の大野町西部から朝地町にかけての地域には町古墳群(朝地町市万田）や向原古墳(大野町北園）など、朝地町南部地域の早尾原古墳・丸山古墳(朝地町上尾塚)・若宮古墳(朝地町宮生)、緒方の漆生古墳群、茜川流域の御塚古墳(大野町藤北)、奥岳川流域の中ノ原古墳(清川町三玉）など見られます。中には直径が 30mを超える大型円墳もありますが、自然地形と変わらない小型のものも多くみられます。こうした古墳の規模は有力者層の格差を表すものと考えられます。


早尾原古墳

古墳には葺石（ふきいし）と埴輪（はにわ）があり、特に前方後円墳などの大型古墳の構造上の特徴といえます。葺石は墳丘表面に敷詰められた河原石で、調査で墳端の外表には石で覆われて造られていることが判明しています。

埴輪は古墳に並べられた土製品で、円筒埴輪や壺形埴輪と呼ばれる形の埴輪が前方後円墳で見つかっていることが知られています。


円筒埴輪（左）と壺形埴輪（中・右）

以上、市内の多くの古墳は古墳時代前期後半から中期にかけて築造されています。埋葬主体部については多くは特定されていませんが、石棺と呼ばれる石製のひつぎが埋められているものと考えられています。

石棺は複数枚の板状の石を長方形状に組み合わせて箱状の棺とした箱形石棺、大きな石を刳抜いて造り出した舟形石棺などいろいろな形があり、いずれも凝灰岩の大型石材を加工して制作されています。


舟形石棺（鉢ノ窪石棺）

市内の後期の古墳

古墳時代中期後半以後、次第に古墳の規模は縮小し、数も減少していきます。後期古墳の埋葬主体には、横穴式（よこあなしき）の構造を持つ石室が造られますが、市内での後期古墳は尾崎古墳（大野町片島）などいくつか知られているのみです。



尾崎古墳の石室床面

同じ時期の墓制として横穴墓（よこあなぼ）と呼ばれる墓が数多く分布するようになります。崖面に横穴を掘り込んで埋葬空間を造る形式の墓地遺跡で、1 基単独もあれば、10 基以上群集する所もあります。凝灰岩の崖面の多い市内では古墳時代後期の代表的な遺跡として各地で盛んに見られ、平野部や狭い谷間などを見下ろす位置に分布しています。本来は入口に板石などで閉塞して、家族墓として何度も利用されていたとみられています。

十六山 1 号横穴墓（三重町川辺）は中期末の初期に築造されたもので、人骨 2 体のほか刀・剣・矛・鏃など多数の武器類をはじめ文様を彫刻した装具も副葬されていました。

六箱（緒方町原尻）では鉄製馬具や刀などの武器類が江戸時代の天保 2（1831）年に見つかっており、当時の経緯の記録により横穴墓があったことが推定されています。発見された遺物は地元で代々大切に保管され、現在まで伝えられています。

他に市内の代表的な横穴墓として、浅草横穴墓群（大野町杉園）は 31 基が群集する市内最大であるほか、竜ヶ鼻横穴墓群（三重町赤嶺）、狐迫横穴墓群（朝地町下野）、三反田横穴墓群（朝地町朝地）、野仲横穴墓群（緒方町鮒川）、城山横穴墓群（緒方町）、長迫横穴墓群（清川町砂田：市指定史跡）などがあります。



浅草横穴墓群

●古代

飛鳥時代以降、律令制度が整えられます。全国に国・郡・里（郷）といった地方行政単位でそれぞれの役所が設置されるほか、命令や情報の伝達や物資輸送などを目的とした、中央と地方を結ぶ官道と呼ばれる交通路の整備も行なわれるなど、中央集権化が進みました。

平安時代になると、荘園の形成とともに律令の支配体制が衰退し、貴族中心であった政治に武士が台頭するようになります。

古代の豊後大野

大分県域である豊後国には郡が 8 か所置かれ、その一つである大野郡の大部分が現在の豊後大野市に相当します。大野郡に置かれた里（郷）は三重・緒方・大野・田口（後の井田）の 4 か所と記されており、現在につながる地名もこの頃には成立していたことがわかります。郡の役所である郡衙（ぐんが）などの位置は特定されていませんが、これらの行政単位ごとに置かれた役所では、徴税や戸籍などの各種帳簿作成・各役所間の連絡などの事務処理が行なわれていました。

また、豊後国と日向国（宮崎県）を結ぶ官道の要所に設置された駅家（えきか）として、大野郡には三重駅と小野駅の 2 か所が置かれました。駅とは連絡通行の馬を常備した施設で、三重駅は三重町市場付近と推定されています。